Project	地域協働専攻　国際協働グループ
A09	**サブカルチャーがもたらす地域貢献**
メンバー	［学　　生］　木村祐生乃/和田朋也/本田響/大谷美月/佐藤颯人/田中初音/島谷紘夢 ［担当教員］　菅原 健太

【背景】

現代社会において、人々はカルチャーをメインカルチャーとサブカルチャーに分類して捉える。本プロジェクトでは、地域の魅力が高い函館において、サブカルチャーが地域貢献にどのような役割を果たしているのかに注目し、サブカルチャーの社会的価値を明らかにすることを目指した。

【目的】

本プロジェクトの目的は、サブカルチャーの要素と地域貢献の関係性について明らかにすることである。そのために、本プロジェクトでは、先行研究の収集・分析を入念に行い、サブカルチャーの理解に努めた。その知見をもとに、「ライブハウス函館ARARA」と「はこだて工芸舎」で観察とインタビューを実施して得た質的データを分析し、その結果を解釈した。

【概要】

本プロジェクトでは、まずは、先行研究からサブカルチャーの解釈において共通する面を抽出し、サブカルチャーの定義を探った。その結果、サブカルチャーとは、「大衆から理解が得られにくく、趣味嗜好を共有する人たちのコミュニティであり、その内部で文化的な結びつきが強く、独自にかつ閉鎖的に発展するもの」であり、「通年的文化と同時に成立し、新たな価値観や独自の社会を確立するが、その一方で、流動的で不安定なもの」であると定義づけることができた。この定義をもとに、本プロジェクトでは、フィールドワーク先を選定した。

【プロセスと成果】

前期では、本プロジェクトの目的に沿って、先行研究を調査する中で、上述のサブカルチャーの定義を見つけ出した。その中で、本プロジェクトの目的が明確となり、以下のリサーチクエスチョン(RQ)も浮上した。

RQ1:サブカルチャーは、地域社会の結びつきを強くすることができるか？

RQ2:サブカルチャーと地域の歴史には、どのような結びつきがあるか？

RQ3:サブカルチャーは、地域にどのような効果をもたらすか？

RQ4: 閉鎖的・独自性といったサブカルチャーの持つ特徴が地域貢献にどう結びついているのか？

これらのクエスチョンに対する答えを得ることができるフィールドワーク先について、前期のプロジェクトでは考察し、その成果を本校地域プロジェクト中間発表会で公表した。

後期において、本プロジェクトでは、質的研究法の中でもフィールドワークを含む調査技法まとめた谷・芦田（2009）をレビューし、研究デザインを明確にした。その中で、RQ1にRQ2を含めて、RQ3にRQ4を含めることで、リサーチクエスチョンを2つに絞り、より詳細な答えを導き出せるようにした。また、フィールドワーク先を「ライブハウス函館ARARA」と「はこだて工芸舎」に特定し、研究実行性を高めた。そのフィールドワーク先で観察データとインタビューデータを収集した。

【はこだて工芸社】

【ライブハウス函館ARARA】

収集した観察・インタビューデータはすべて書き起こした。その後、戈木クレイグヒル(2005)によるグラウンデッド・セオリー・アプローチが用いる分析手順に沿って、記述データのオープンコード化とカテゴリー化を行った。そのうえで、抽出したラベル(概念)をまとめたカテゴリー群を「状況(条件)」・「行為・相互行為」「帰結」のパラダイムを用いて配置し、それらをもとにデータ内の出来事をストーリー化して解釈した。

その結果、サブカルチャーの持つ独自性、または、自らの広めたいものを求めていくことによって、地域に住む人々やこれからの地域を担う人々が集まる場が形成されていくことが明らかになった。また、その場でできる様々な活動を地域単位で行っていることが、地域観の結びつきを強くしていると考えられた。さらに、サブカルチャーについて、マイナスなメージの払拭と同時に、盛り上げるための様々な活動を地域を巻き込んで実施することで、地域の特色を創出していた。サブカルチャーの存在が、地域のコミュニケーションの場を提供し、人々の結びつきを強め、地域の特徴づけに貢献し、ひいては、経済効果も生み出していると考えられた。

【総括と反省・今後の課題】

前期には、先行研究のレビューから各事例の解釈、そして、リサーチクエスチョンの設定を入念に行った。そのため、研究デザインを精緻化し、質的調査を行うには至らなかった。前期から質的調査を実施できたならば、フィールドワーク先をさらに増やすことができたかもしれない。

後期では、フィールドワーク後に観察・インタビューデータの書き起こしや、その記述データの分析に時間を要した。そのため、研究結果をまとめ、考察することに限界が生じた。もし、結果の考察がより入念にできたなら、より意味のある成果を成果発表会で報告できたと考えらえる。

今後の課題として、本プロジェクトでは、地域を函館に限定した活動であったため、他の地域でも同様の研究活動を実施し、収集したデータの比較・検討を行う必要がある。その中で、サブカルチャーがもたらす地域貢献に関する研究課題を発展させることができ、新たなリサーチクエスチョンを見つけだすことができると考えらえる。そのクエスチョンに対する答えを見つけることができるより豊かなプロジェクトデザインが求められる。

【地域からの評価】

フィールドワーク先で調査協力者の方々から頂いた語りの中で、自分たちの得意分野や、主戦場としているところで、自分たちの地域を盛り上げようとしている試みが含まれていた。しかし、地域の盛り上げとサブカルチャーの結びつきに関して、プロジェクトの実施者側が十分に説明できなかったこと、また、「サブカルチャーとはどういうものなのか」という質問に対し、答えられなかった面もあったことから、サブカルチャーがもたらす地域貢献について十分に説明できたとの評価までには達していない可能性がある。その一方で、調査協力者の方々から、「このようなプロジェクトはなかなかみられず、地域に密着して活動してくれるのはうれしい」との評価も得ることができた。

【謝辞】

本プロジェクトにおける調査協力者の皆様に感謝申し上げます。誠にありがとうございました。

【参考文献】

戈木グレイグヒル滋子(2005)「質的研究法ゼミナール;グランテッドセオリーアプローチを学ぶ」医学書院
谷富夫・芦田徹郎(2009)「よくわかる質的社会調査—技法編」ミネルヴァ書房

【その他】

年間スケジュール

■前期

4～5月
概要説明/地域の課題の理解・特定
6月
地域の課題を解決するためのプロジェクトの構想
6月～7月初頭
プロジェクトの遂行
7月～
プロジェクト遂行過程の中間発表会準備/実施

■後期

10月初頭
地域プロジェクトⅠの反省・問題点の特定
10月末～11月中頃
プロジェクトの改善案の策定
11月末～12月
改善版プロジェクトの遂行
1月
プロジェクトの総括と成果公表準備
2月3日
プロジェクト成果発表会実施
成果報告書の作成・提出